

比較思想学会の初期の事務局活動を中心として

宮野 升宏

私は、比較思想学会が創立する当時、新前の助手職（大正大学）にありました。そういう関係で初期の頃の会議から会議の場に居りました。

会議は煎茶と和菓子を用意して行われましたが、この準備が私の主なる役目でした。

比較思想学会の設立に至る経緯について一言しますと、比較思想学会の始まりの切っ掛けは、金沢市の医師・松尾宝作氏と中村元先生の接触にあったようです。松尾氏は、青少年の育成に関心を持たれていて、印度学仏教学会などにおいて中村先生に研究会の立ち上げをお願いしていました。ここから大きく学会の設立へと向かうことになりました。

第一回の会議は大正大学で開かれ、私の記憶では、中村元・末木剛博・玉城康四郎・三枝充恵・松浪信三郎・梶芳光運・田丸徳善・白木淑夫・峰島旭雄・見田政尚、等の諸先生が出席されました。司会役は、会長の中村元先生に代わって峰島先生が務められ

ました。この時までに、学会の事務局は大正大学文学部西洋哲学研究室に置かれることになっていたのであります。

この最初の会議で、比較思想学会の創立大会の開催（昭和四九年六月八日）が決まりました。このとき松浪信三郎先生から記念講演の実施の提案がありました。他の先生から記念講演は松浪先生にお願いしたいとの声が出て、そのように決まりました。

後に峰島先生から伺ったことですが、比較思想学会設立に当たり、中村元先生は、井筒俊彦先生に設立のご挨拶に、峰島先生を伴って、ご自宅に上られたそうです。

最初の会議前後には、設立趣意書・会則・設立発起人一覧・入会申込書などを添えて関係者へ入会の呼び掛けが行われました。このような呼び掛けは、関連の学会の大会の折にその会場に出向き、許可を得たうえで関係書類を配布いたしました。このような呼び掛けの成果もあり、第一回の創立大会は参加者二〇〇名を超える程の盛会裡に終わりました（因みに、創立大会から半年程経

った十二月には、会員数は五七六名となっています。）

その後の大会では大学を会場としないこともあり、そのような時にはほとんど、峰島先生は一〇三名の事務局員を同道して、下見分されました。事務局の運営において峰島先生のご指示とご指導は欠かせないものであり、これらが無かつたら私の行っていた仕事も無かつたことでありましょう。峰島先生の活動力について、某出版社の部長さんが、「峰島先生は、大学教授としておくには惜しい方だ」!?と述べられたのを聞いています。

また当時は、会員への連絡はほぼ郵便でしたが、送付のための宛名は手書きでした。つぎには、会員一人ひとりの住所氏名をガリ版で刷るように小さなローラーを使って印刷していききました。大きい机の上に発送物を並べて、その上に住所氏名のガリ版をのせて、順次ローラーで印刷していくのです。いづれにしても人海戦術で熟していったわけです。それで副手の人・院生・学生の方々にお世話になり、大変有難いことでした。中には非常に上手に熟す人も出てきました。そしてその後ローラー方式には機械が導入され、ガリ版の作製は業者に依頼することもできるようになりました。会員への諸種の送付物の中には、会誌の『比較思想研究』もあるのですが、これはかなりの分量になりますので、最寄りの郵便局まで持ち込むのも一仕事でした。（当時は学術刊行物の扱いにしていました。）それで大正大学の構内で見つけたリヤカーに積み込み、郵便局まで引いて行つたのを思い出します。また、後に述べる大正大学での大会や例会などでは、多種類の張り紙や大会用などの看板が必要であり、その内容は毛筆で書いていましたが、

それに取り分け尽力してもらったのは、現在理事の能書の渡辺明照先生でした。

創立から二年経って、会員名簿の作製の話が持ち上がりました。先ずは、原稿となる入会申込書を、名簿に載せるデータ（氏名・郵便番号・住所・電話番号・生年月日・所属・専攻）を指定した上で、印刷屋さんに渡しました。そしてゲラ刷りが出来上がったら、こちらで校正しなければなりません。期末試験の監督中に時間をとって校正したことも思い出します。名簿の原稿（入会申込書）を整理していた段階で、発起人名一覧の中にある上山春平先生の入会申込書が見つかりませんでした。つまり入会申込をされていないかもしれませんので、電話をかけて確認することになりました。その結果、上山先生は入会のお気持ちではなく、「発起人になっていておかしいのだけれど、入会の必要性は感じておりません」というご返事でした。

事務作業には多種あるわけですが、その中で大事な作業の一つに、学会の会計をまとめる仕事がありました。収入には会員各人の年会費がありますので、各人のカードを作り、郵便局から届いた郵便振替の用紙から転写します。同時にリストアップして一覧表にして会費収入を合計しました。支出は領収証をもとに、日日順に並べて、一覧表にまとめます。最初期にはそれぞれ手書きでまとめていました。

比較思想学会の大会は創立大会から第三回まで、続けて三回は大正大学において開催されました。こうして事務局として大会開催の要領を掴むことができたのではないのでしょうか。なおまた、

比較思想研究の草分け的存在であった川田熊太郎先生からは、大正大学は比較思想のメッカになるとの言葉をいただいています。

創立大会では、創立大会挨拶として中村元先生の「比較思想研究の未来性」および創立大会記念講演として松浪信三郎先生の「私のなかの比較思想」が、創立大会シンポジウムとしては「比較思想方法論」が行われています。第二回大会では、シンポジウムとしては「東西における時間論」が、第三回大会では「人間とは何か」が、第四回大会では「生きがいについて」が、第五回大会では「比較思想とは何か」が、第六回大会では「比較思想と比較文化」が、第七回大会では「明治期における西洋思想の受容と反応」が、第八回大会では「大正・昭和期における西洋思想の受容と反応」が、第九回大会では「東西の自然観」がシンポジウムとして行われました。以上のシンポジウムは、広く比較思想方法論に関するものと、東西の諸思想の比較に関するものが含まれているとすることができましよう。そしてシンポジウム「人間とは何か」および「比較思想と比較文化」は書物として出版されています。

第八回大会は、佐渡、佐和田町の佐渡中央会館において開催されました。この大会は前後三日間にわたり、初日には中村元会長の講演（演題「北吟吉と土田杏村を憶う」）が、二日目は通常の第八回大会が、三日目には佐渡研修見学が行われました。この研修見学はこの地の文化・風物・情緒などを堪能するものでしたし、そしてこれはその後の大会時の研修見学に先鞭をつけるものとなりました。

（みやの・ますひろ、哲学・仏教思想、比較思想学会会員）